

期日:平成24年10月25日(木)

会場:独立行政法人住宅金融支援機構すまいのホール

主催:(一財)住宅生産振興財団、日本経済新聞社

後援:国土交通省、住宅金融支援機構、都市再生機構

〈第1部〉基調講演

「伝統的な日本の暮らしに学ぶ —昭和30年代の暮らしに学ぶ—」

小泉和子(昭和のくらし博物館 館長)

今日は、まずはじめに、講演のテーマにある「伝統的な暮らし」というものは何かということからお話したいと思います。

「伝統的な暮らし」と言いますと、2つのことが言えると思います。1つ目は、自然を尊重し自然とともにある暮らしのことです。2つ目は、頭、目、手、足などのあらゆる五感、つまり体と心を使って生きる暮らしのことです。

そういったものを踏まえて、現在の暮らしについてあらためて考えてみますと、サブタイトルにありますように、じつは昭和30年代頃の暮らしが私たち日本人にはちょうど良いのではないのか。そんなお話を今日の講演の最後にしたいと思います。

昭和のくらし博物館

私は現在、「昭和のくらし博物館」という博物館を個人で運営しています。これは、もともとは私の両親が建てて住んでいた家を博物館にしたものです。主に昭和30年代ぐらいの暮らしを展示しています。

当時、私は文化庁の文化財専門委

員として建造物の国宝指定や、重要文化財指定などに関わってきました。でも、多くの日本人が暮らした庶民住宅は、何の保存措置もされていませんでした。でも少しあとに登録文化財制度ができ、文化財の裾野を広げることになりました。

私の家は、昭和26年に住宅金融公庫の融資を受けて建てた家です。昭和25年に住宅金融公庫制度ができ、すぐに父が申し込みましたので、公庫住宅の最初期の家です。父が設計したのですが、当時父は東京都庁に勤める建築技師で、公庫住宅の審査をやっていたので、この家は模範答案のようなものです。そういう意味でも、当時の庶民住宅の資料として、残しておく必要があると思って公開することにしました。

「家を残し、暮らしを伝え、思想を育てる」ということをモットーとして運営しています。

建物は18坪の木造住宅です。公庫の初期の基準は9～18坪まででしたから、上限ぎりぎりの広さです。

建設当初のころは、茶の間ではちゃぶ台を使い、座敷では母が和裁を

やっていました。台所は上げ板になっていて、カマドで火を焚く。水は井戸から汲んでいて、ガスや水道設備が本格的に整ったのは昭和30年代になってからのことです。

2階には4畳半2間があり、子ども部屋と下宿人部屋でした。多くの家が公庫の返済に下宿代を当てていました。

下宿人部屋では、現在、企画展を開催しています。内容は、昭和の暮らしをさまざまな角度から検証したテーマを、暮らしについて考えたり伝えたりする活動と連動させています。全国各地から参加者が集まって勉強会をしています。たとえば、大正末から昭和の初めに、それまでの銘々膳からちゃぶ台に代わったのですがその背景には何があったかとか、『家で病気を治した時代』というテーマのもと、家庭看護について考えてみたり、その成果を展示し、図録としてもまとめています。

3月になりますと、『火鉢を囲んで建築の歴史』という、建築史の講座も開催しています。また『家事の伝習講座』という体験講座も開いてい



「昭和のくらし博物館」外観



展示室「座敷」



展示室「茶の間」



展示室「台所」



展示室「子ども部屋」

ます。小学校の授業として訪れた子どもたちに家事を教えたり、ご近所に住んでいらっしゃる紙の研究者が障子張りを教えに来てくださったこともあります。

同時に、こういう生活を記録しておく必要があると思いましたので、映像としても残しました。記録したのは博物館をつくる10年ほど前になるのですが、母がやっていたような昔の家事は、このままだと消えてしまう。そう思って母の協力のもと、家事をやってもらい、3年間ほどかけて記録映画に撮りました。洗い張り、縫い直し布団づくり、おはぎやお赤飯、おせち料理づくりなど多くの家事を撮影しました。

博物館にしたはじめは、資料として残すことが目的だったのですが、その後13年が経ってみますと、この

博物館で展図しているような昭和30年代ぐらいの生活が、じつは私たちに日本人にはちょうどよいのではないかなと思うようになりました。もちろんすべてが昔のままということではないのですが、3.11の東日本大震災以降、とくにこの考えが強くなりました。

日本の伝統的な生活文化

その国の生活文化は、歴史的条件と自然条件によって決定されます。振り返ってみますと、日本は、貧乏文化を洗練してきた文化だと言えます。

日本は恵まれた自然条件のおかげで、勤勉に働きさえすれば生きていくことができました。その代り金持ちにはなれませんでした。行事や生活に季節を採り入れ、自然を崇拜

する文化を発達させてきたわけです。ヨーロッパや中国のように、「人工的なものこそ人間のパワー」「自然は野蛮」という考え方とは異なっています。日本人はプリミティブなままに、それを洗練してきたわけです。たとえば、茶室は農家のような家でありながら、洗練されています。

そうやって、日本の文化は自然を生かし、サステナブルな文化を発展させてきたのです。

昭和30年代の暮らし

昭和30年代は、洗濯機やテレビ、冷蔵庫などの3種の神器と呼ばれる家電や電気釜が登場して、家事の負担が軽くなりはじめた時代です。いわば「半電化」な暮らしでした。

住宅はまだ木造住宅でした。プライバシーがなく、家の修理や庭仕事も



企画展示室（下宿人部屋）



企画展図録



『火鉢を囲んで建築の歴史』開催風景

自分でやらなければならず、お風呂もない家が多く、銭湯に行っていました。電話も普及していませんから、呼出し電話です。クリーニング屋さんも高価ですから、服は家で洗う。お葬式も、火葬以外のことはすべて家でやっていましたし、宴会もレストランやホテルもまだ今のようにありませんでしたから、「人寄せ」と言って家に呼んでいた。病気は家で看病する家庭看護で、お産場所も家でした。

私の家にも下宿人が2人いましたが、その人たちの家族が来ると、4畳半の部屋にみんなで泊まっていました。そのときに布団を貸してあげたり、ご飯も一緒に食べさせてあげたりしました。泊まりに来る方も「お世話になるから」と、お土産を持ってきたり、田舎から何か送ってきたりと、そんな付き合いがありました。

昭和22年の新憲法によって家父長制は解除されましたが、まだまだ残っていました。親戚付き合いや近所付き合いも多く、このため大変忙しくて、子どもも家事を手伝わなければ間に合いませんでした。

昭和30年代の暮らしはそうした人々の努力忍耐に支えられていたのです。このため、そういうところからも逃れたいという気持ちが女性にとくに強烈にありました。

さらに、映画などを通じてアメリカの生活がどんどん日本に入ってきます。『パパはなんでも知っている』のように、民主主義的で明るく自由で、生活も楽。日本人はそういうものへの強烈な憧れを抱き、高度経済成長に走っていくわけです。

さらに、映画などを通じてアメリカの生活がどんどん日本に入ってきます。『パパはなんでも知っている』のように、民主主義的で明るく自由で、生活も楽。日本人はそういうもの

のへの強烈な憧れを抱き、高度経済成長に走っていくわけです。

便利であること、快適であるということが生活の豊かさだと考えたわけですが、結果としては、これが間違いでした。

人を育てる暮らしとは

戦後、男女同権や労働者の権利確立、農地解放など民主主義政策は、日本の経済成長を大きく支え、工業化も同時に進み、お金と物が溢れる国になりました。しかし現在、競争社会、ゆとり喪失、孤立、家庭崩壊、地域共同体の崩壊、伝統文化の消滅、都市の過密、農村の過疎など、言い出したらきりがなくらいの社会問題があります。二酸化炭素排出や公害、原発問題などの環境問題も深刻です。

日本の風土のベースであり、日本人にとっての命綱だった自然を破壊してきた私たちは、道を踏み間違えたのです。

そうやって振り返りますと、昭和30年代の「半電化」な暮らしは、自然をそれほど破壊せずに、人を育てる暮らしであると言えるのではないのでしょうか。

じつは、家事には人間を育てる大きな力があります。曹洞宗・永平寺



障子張り講習



子どもたちが体験する『家事の伝習講座』



記録映画『昭和の家事』より

開祖の道元は、「日常坐臥、すべてこれ修業」と言いました。掃除や炊事などの家事をするなかで人間が修業できる。段取り、観察力など、さまざまな生活技術が身につく。また、人と一緒にいろいろなことをやることによって、人の役に立つ喜びや、どういうことをしたらその人は痛みを感じるかなどを学びとります。

昔の暮らしのなかでは、そういうことをたくさん学べたと思います。今は便利になり、いくらでも与えられ、家事もしなくなり、学びとるものが少なくなっています。いろいろなことを自分でやるのが、いろいろな子を育てていくのではないのでしょうか。

選択する生活哲学を持ちなさい

最近、映画『Always 3丁目の夕日』やNHKのテレビドラマ『梅ちゃん先生』のように、昭和30年代が舞台として取りあげられ、その良さを感じてみなさんノスタルジックになっておられるようです。でも、当時の暮らしはさきほど言ったように決して便利ではなく、快適でもありま

せん。嫌なこともしなければなりませんし、我慢も必要です。たとえばお客さんを泊めるとするとお客用の布団を干して準備し、部屋を掃除して、料理の準備もしなければなりません。お客さんのための食器も用意しなければなりません。また帰ったあとは、寝間着やシャツも洗わなきゃいけない。本当に大変です。

昔の女性はそれを仕方ないと思って黙々とやっていましたが、今はそういう時代ではなくなり、嫌だと言ってやらなくなった。でも、やはりそういうことをやらなければいけないのです。重要なことは、これを昔のように女性だけにするのではなく男性もしなくてはならないのです。

おせち料理というものは、本来は、みんなでつくることに意義があります。仕込みから始めると大変なイベントです。つくることによってみんながそれに参加して、子どもたちはできていく楽しみが分かる。デパートで買ってきたものを食べることとの差がわかりますでしょう。

家電を含め、今やいろいろな家事が外部化している時代ですから、そ

れとの兼ね合いを踏まえたうえで、「選択する」。それこそが今の時代の人の哲学だと思います。何でもかんでも受け入れるのではなく、「私はこれをやる」と決める。その生活哲学が重要ではないでしょうか。

評論家の吉村英夫さんという方が、「血縁・地縁を越えた、対等で平等な人とのつながり」「個は守りつつ、個を克服した共同体の確立」が大事だと言われてますが、まさにそうだと思います。

重ねて言いますが、金持ち文化は日本人には合いません。お金の使い方が分からないのは、バブル期の日本を見れば明らかです。むしろ貧乏文化を洗練して、賢く、日本人にとって大切な自然を生かしながら生きていくほうがよいのです。



小泉和子（こいずみ かずこ）

昭和のくらし博物館館長。1933年東京都生まれ。女子美術大学卒業後、東京大学で工学博士の学位を取得。日本の家具史・生活史を研究。資料館の展示企画や重要文化財建造物の家具などの復元を行う。2007年京都女子大学教授を退官。家具道具室内史学会会長。世界遺産石見銀山重要文化財熊谷家住宅館長。（有）小泉和子生活史研究所代表取締役。著書に『室内と家具の歴史』『筆筭』『昭和のくらし博物館』『船筆筭の研究』ほか多数。